

セクシュアルマイノリティと貧困についての研究序説

早稲田大学 志田哲之

【1. 目的】

本報告の目的は、セクシュアルマイノリティと貧困がどのように論じられてきたかを概観し、今日的な問題を検討・考察することにある。「LGBT」の言葉のもとに、国内外を問わずさまざまな活動が展開されている。これが社会からの注目を集めるにつれ、批判もまた沸き起っている。代表的な批判の一つは、新自由主義的な動きとの結びつきの中で高所得で豊かな消費者として注目される当事者とそこから置き去りにされる当事者の格差である。

とりわけ近年では、国内でもこの格差が問題化されるようになり、セクシュアルマイノリティもまた、格差社会と無縁ではないように考えられる。

【2. 方法】

ファーストステップとして、就業や経済について言及している文献を確認しながら、これを検討し、考察を行なう。セカンドステップとして、貧困にある当事者への支援活動を行なっている人物にヒアリングを実施し、日本の現状を垣間見る。

【3. 結果】

D'Emilio, J. や Rubin, G. が示したように、アメリカにおいては、資本主義の発達とセクシュアルマイノリティの出現は密接に結びついている。また当事者の大都市への移住指向は高く、一方で大都市での社会的・経済的地位の低さが指摘されてきた。

日本でも 1970 年代の都市病理学の論文から同様の移住指向がうかがわれる。1990 年代の矢島正見らのインタビュー調査からは、進学や就業の際にセクシュアリティが問題となり、不安定な状況に置かれた当事者の姿も見られる。さらに 1999 年には、河口和也が新宿二丁目の路上に立ち売春をして生計を立てている（男性）同性愛の若年層へ聞き取り調査による論文が発表されている。これらから貧困は継続的な問題として捕捉可能であり、直接的な研究テーマとされることは少なかったが、決して目新しいテーマではないともいえる。そしてこれらの研究から共通して見出されることのひとつには、異性愛規範に基づく家族等の共同体的な集団からの離脱によって直面する相互扶助的な関係の希薄化と、ひとりで生きていくことの脆弱さが指摘できる。

これらの点を中心に、貧困にある当事者への支援活動を行なっている人物へのヒアリングを行なう。

【4. 結論】

以上から、社会的・経済的地位の低さや貧困は、セクシュアルマイノリティにおいて（も）古典的ともいえる問題だと考えられる。

今日、グローバル企業を始めとした大企業からの「LGBT」市場への注目や、そこで働く人々の就労条件の改善が示されるものの、だれもがそこに参与できるわけではなく、困窮した生活を送る人々もいる。ただ、グローバル化が進展する中で、格差や貧困の拡大が叫ばれ、セクシュアリティが主たる貧困の条件となりうるかといった疑問もある。今日見られるセクシュアルマイノリティにおける貧困とは、特有の条件が関与して生じるものなのだろうか、仮にそうでしたら、それは今日いかなるものなのか。上述から、異性愛規範に基づく家族等からの支援の欠如が仮説として立てられるが、実態はいかなるものなのか。

以上の問いを、今後の研究への出発点として設定することで報告を終えたい。

※なお、本報告の多くは昨年度の大会にて報告する予定の内容であった。しかしながら昨年度は体調不良のため、報告の取下げを余儀なくされた。今年度は昨年度に加え、研究の進捗を反映した報告を行なう。